

三びきのタマ公

本間芳男・作 村山 陽・絵



* 写真提供・川内小学校／刈田政美



三びきのタマ公^{こう}

昭和57年10月20日 初版発行

著 者 本間芳男・作 村山 陽・絵

発行者 山浦常克

発行所 株式会社あすなろ書房

東京都新宿区早稲田鶴巻町212-11

郵便番号 162

電話 東京(203)-3350

振替 東京9-63084

印刷所 錦明印刷株式会社

製 本 ナショナル製本協同組合

©Y. Honma 1982

落丁・乱丁本は送料小社負担にてお取り替えいたします。

8330-63801-0060

三びきのタマ公

本間芳男・作
村山 陽・絵



三びきのタマ公——もくじ

1 三つのどうぞう…………… 6

2 めすイヌのわたし…………… 17

3 刈田さん、大すき…………… 28

4 前足を血にそめて…………… 40



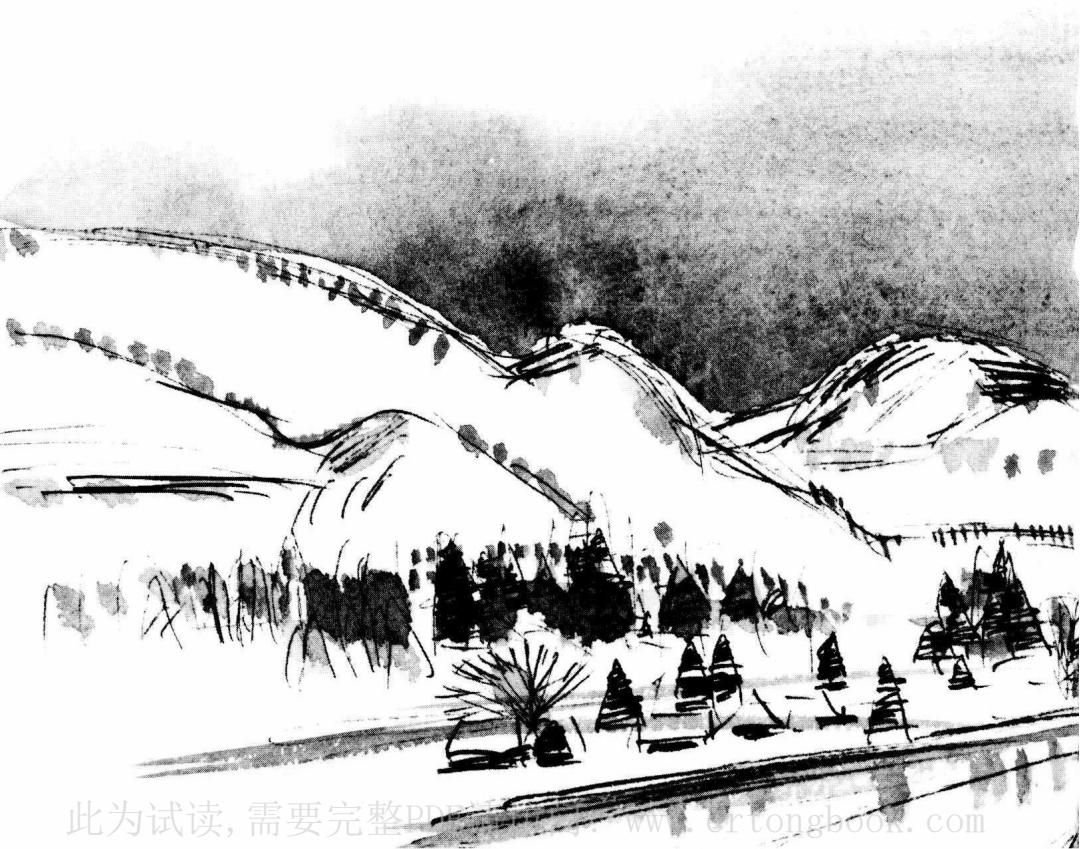
5 山の王者、ぎん……………50

6 走れ、力のかぎり……………62

7 生きつづけるわたし……………80

8 学校で、公園で、駅で……………92

タマを愛して……………98









1 三つのどろどろ

「忠犬タマ公^{ちゆうけん こう}」というイヌのどうぞうが、三つもあります。

ひとつは、新潟市^{にいがたし}の白山公園^{はくさんこうえん}の中、池の近くにたっています。

「なあ、タマ公。」

黒いぼうしをかぶって、白いあごひげをはやしたおじいさんが、いつも、どうぞうに話しかけます。

「せんそうなんて、だれが、始め^{はじ}たんじゃ。おまえも、そう思うだ

ろ。うちのむすこは、せんそうに行つたまんま、
帰つて来なかつたんじゃ。」

むすこを、せんそうでなくした
おじいさんは、公園こうえんのタマ公こうを、
いつまでもながめているのです。





もうひとつは、新潟駅にいがたえきにあります。

ある日、黄色いキャスケットをかぶって、オーバーオールをはいた女の子が、人ごみの中から、かけつけてきました。

「わたし、これから、お母さんと東京とうきょうへ行くの。東京でね、お父さんが、病びよう気きになったの。

おねがい。ね、タマ公こう。

お父さんの病びよう気き、なおして。」

女の子は、超特急ちやうとつきゆう「あさひ号ごう」に乗のって、

お母さんと、

東京へ行きました。

最後のひとつは――

いいえ。どうぞうとしては、この「忠犬タマ公」のどうぞうが、いちばん古いのです。

山にかこまれた、川内かわち小学校の校庭こうていにたっています。

校長先生は、

「タマ公のような、強い人間になりなさい。心のやさしい人間になりなさい。」

と、小学生に教えています。

けれど、強い人間とかやさしい人間とかは、小学生は、あまり気にしていません。頭あたまやしっぱをなでたり、時には、タマ公にウマ乗のりになって、遊あそんだりします。



この三つのどうぞうの、タマ公^{こう}って、じつはわたし……。

自分のことを、人間のようにな、「わたし」って言^いえばいいのかしら。
だって、めすイヌなんです。わたし。

わたしのどうぞうが、三つもあるのです。

その三びきのどうぞうが、ならんで走^{はし}って来るゆめを見ることがあります。

お月さまの、大きなばん。

サクラの花が、まんかいの春。

白いほそう道路^{どうろ}を、三びきのどうぞうが、一列^{れつ}にならんで、速足^{はやあし}で走^{はし}っているのが、わたしには見えるのです。

学校のどうぞが先頭で。

少し体の大きな、公園こうえんのどうぞがまん中で。

駅えきのどうぞが、いちばん後ろで。

タツクルタン　タツクルタン

タツクルタン　タツクルタン

まっすぐまっすぐ、十二本の軽い足音かるまでが、わたしには聞こえるのです。

そこでいつも、ゆめがさめるのです。

——三びきのどうぞが、そうだんをして、きつとわたしに、会



